大手前大学論集　第13号（2012）pp.179－199

2年次必修科目における図書館利用教育

横　谷　弘　美

要　旨

大手前大学図書館では、図書館利用者の利用動態などを把握する目的で、月ごとに図書館利用統計を出しているが、2012年度春学期は前年度同時期に比べていくつかの項目で大きな増加がみられた。そのもっとも有力な要因として考えられるのが、１年次および２年次の必修科目における図書館利用教育である。本稿では、まず大学図書館における図書館利用教育のありかたについて確認し、大手前大学図書館の全体的な利用状況を概観した上で、２年次必修科目の内容、図書館による学習支援と図書館利用教育の内容と、学生の図書館利用動態の変化について検討した。学生の図書館利用動態については月次の図書館利用統計以外の要素も指標として加え、考察を行った。それによって、今年度の取り組みでは課題解決型学習（Problem Based Learning：以下、PBLとする）と連動して図書館利用教育が行われたことで、多くの学生に図書館資料の利用を促したという結果が確認された。あわせて、図書館利用教育の効果と意義に関しては、さらに複数の観点から評価することが必要であることに言及する。

キーワード：大学図書館、図書館利用教育、情報リテラシー教育、学習支援

１．はじめに

大手前大学図書館では、2012年度春学期の入館者数や貸出数が前年度同時期に比べて増加した。その第一の要因として考えられるのが、１年次および２年次の必修科目における図書館利用教育である。大手前大学では、「幅広い教養のうえに形成される専門性（メジャー）[1]」を意味するリベラルアーツ型教育と社会人基礎力の育成、入学後に専攻分野を決めるLate Specializationを大学の使命およびカリキュラムポリシーに掲げているが、その基礎作りのため、コアカリキュラムに１年次および２年次の必修科目としてキャ

リアデザインという科目を設定している[2]。複数クラスを対象に同一の内容で行われる図書館利用教育としてもっとも受講者数が多いのは、この１年次および２年次のキャリアデザイン科目（キャリアデザインⅠ～Ⅳ、各半年15コマ、２単位）中に行われるものである。2012年度の春学期には、１年次のキャリアデザインⅠと２年次のキャリアデザインⅢで図書館利用教育が行われた。キャリアデザインⅠは１年生の全員が履修するのに対して、キャリアデザインⅢは、先修条件である１年次キャリアデザイン科目の成績がＦ＝不合格となった学生は履修できないため、2012年度春学期キャリアデザインⅢの履修者数は２年生全体の約７割、581名となったが、それでも１年生よりも２年生において図書館利用状況に大きな変化が表れた。

キャリアデザインⅢでは、授業の１コマを使って図書館利用教育を行い、また授業外学習課題において論文（研究レポート）の参考文献リスト作成に取り組むことが履修者に課せられた。この学習内容、特に課題設定が、それまで図書館利用が低調であった学生にまでも図書館資料の利用を促すなどの効果があったとみられる。本稿では、筆者が一担当教員としてだけでなく授業運営のコーディネーターとしてもかかわったキャリアデザインⅢの授業および課題内容に注目し、学生の図書館利用状況にどのような変化が表れたかを点検し、図書館利用教育の効果について、また大学図書館が取組んだ学習支援対応について考察したい。

なお、図書館利用状況のデータ分析においては、月次で作成されている図書館利用統計データのほか、図書館業務システムの貸出履歴データおよび後述するキャリアデザインⅢ用「図書館資料複写許可書」の受付状況について情報提供を図書館より受け、利用者氏名や利用対象資料を具体的に明らかにしない形でデータ処理を施した。

２．大学図書館における教育・学習支援としての図書館利用教育

⑴　図書館利用教育の変容

図書館がサービスする資料・情報資源は、一定のルールと仕組みによって組織化され、提供されている。利用者がそれらを有効に使いこなせるようになるためには、図書館（その施設や資料・情報資源、サービス）の使い方を一定程度まで理解、習得している必要がある。そのため、利用者が図書館の使い方を理解、習得するために提供されるサービス、すなわち図書館利用教育（利用者教育ともいう）は、図書館にとって必然的なものである。

社会教育機関である図書館がこれを行うことは、いまや重要な図書館の役割のひとつに数えられるが、かつては利用者自身が基本的な文献利用技術などを習得した結果、利用者が自立的に図書館を利活用できるようになることで図書館（図書館員の業務）の省

力化も促されるという捉え方がその中心にあった。つまり、「図書館にとってあらまほしき」利用者の知識なり技能を育成するものであったといえる。また、図書館利用教育は付随的、副次的なサービスとして、とくにレファレンスサービスの一環として理解、実施されてきたが、現在では、図書館による利用者支援として展開され、利用者サービスの一つと呼べるまでになっている。

その教育内容に変化が生じたのは、ひとつには情報化の進展とともに、情報の電子化・情報ネットワーク環境の整備などが図書館にも及んだことによる。急速な情報環境の変化が図書館および図書館利用教育に変化を促した。他方で、従来のコンピュータ・リテラシー概念に関連して、意思決定や問題解決のための情報の入手と利活用にコンピュータがいかに役立つかということを理解する必要性が論じられることで、その要素は図書館利用教育にも取り込まれていくようになった。そしてさらに、図書館の所蔵する文献資料をはじめとした館内の情報資源以外の、データベースやインターネットなどさまざまな外部情報資源をも使用し情報を探索することが、図書館利用教育に含まれるようになった。その契機となったのは、アメリカよりもたらされたinformation literacyの考え方であり、それはまず初等中等教育・学校図書館をフィールドとした研究から、やがて大学教育・大学図書館にも及ぶものとなって、図書館での情報検索と各学問分野での基礎的な方法論についての教育を融合させるものとなっていた。

これ以降の段階では、図書館が行う教育的活動は、図書館にとっての「あらまほしき」という文脈における図書館利用者の自立を促すものから、図書館利用という枠を超えて、利用者個人の生涯にわたる、主体的な情報活用の能力形成を支援する活動（サービス）という認識での展開がなされるようになる。図書館利用教育は「すべての利用者が自立して図書館を含む情報環境を効果的・効率的に活用できるようにするために、体系的・組織的に行われる教育」[3]と定義され、図書館サービスの案内と情報探索法指導に加え、情報整理法指導、情報表現法指導の領域にまで及ぶものとされるようになった。

そうして、それまでの文献利用指導や図書館利用教育、いってみれば情報にアクセスするために「図書館を使う力」、すなわちライブラリー・リテラシーについての教育が、その内容を拡張し、「情報を使う力」すなわち情報リテラシーの重要な一部であると捉えられるようになって、図書館利用教育は「情報リテラシー教育」という文脈の中におかれることになる[4]。

(2) 大学における図書館利用教育

大学図書館は、大学における教育と研究を支援するため設置されるものとなっており、学生の学習や大学が行う高等教育および研究活動の全般を支える重要な学術情報基盤としての役割をもっているが、前項でみたように、近年は特に教育的機能や学習支援機能

が重視されてきている。

文部科学省の科学技術・学術審議会 学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会が2010年12月にまとめた『大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像―』においても、「大学図書館に求められる機能・役割」の第一に学習支援および教育活動への直接の関与が挙げられ、特に学習支援については、「最近の大学においては、学生が自ら学ぶ学習の重要性が再認識され、その支援を行うことが大学図書館にも求められている」「大学図書館は、大学における学習、教育、研究活動の変化や新しい動向に対応し、より効率的な支援を展開するとともに、特に学生を中心とする利用者の情報リテラシー能力の向上にはより積極的に関与していくことが望まれる。[5]」ということが改めて確認されている。

そうした大学図書館が行う学習支援や教育的役割での関与をどのように称するか、その内容はどうあるべきか、どのような体制で、どういった連携と協力のもとに行われるべきか、といったようなことはさまざまに議論されてきたところである[6]が、ここでは、そのコアとなる要素は従来の図書館利用教育にはじまるものであり、図書館利用教育の本質は先述の定義による、「すべての利用者が自立して図書館を含む情報環境を効果的・効率的に活用できるようにするために、体系的・組織的に行われる教育[7]」であると確認しておく。大学図書館における図書館利用教育の内容や目標とするべきところは、アメリカの大学研究図書館協会（The Association of College and Research Libraries : ACRL）が定めた“Information Literacy Competency Standards for Higher Education[8]”や、日本図書館協会 図書館利用教育委員会がまとめた「図書館利用教育ガイドライン　大学図書館版[9]」などから知ることができるが、特にアメリカをはじめとした英語圏での動向については大城善盛によってまとめられており[10]、大学図書館の教育的機能重視への流れなどが紹介されている。そして日本の大学図書館界においても多くの実践報告と検討、議論が重ねられてきたところであり、赤瀬美穂や長田秀一らの指摘によれば「カリキュラムとの連携を模索して[11]」、「文献利用指導や図書館利用教育を大学の学部教育のプログラムに導入しようとする試みがなされてきた[12]」のである。実践上では、図書館オリエンテーションのほか、OPAC利用法、文献探索法の指導などが中心となることが多く、授業科目（専門分野）や卒業論文・レポート作成と関連させて情報の整理法や表現法が指導されることもある。このレポート作成等のアウトプットに至るまでを含めた捉えかたが、情報リテラシー能力の向上に関わって役割を果たすうえでは非常に重要な要素となっている。

⑶　大手前大学図書館の取り組み

現在、大手前大学図書館では、特に学習を支援する図書館としての充実を目指してい

る。教員からのヒアリング、シラバスの調査、アンケート調査などを行って、教員と学生、両者のニーズを吸い上げてサービスに活かし、図書館資料の利用や授業以外の支援についても関連組織（学習支援センター、ITサポートセンターや資格サポートセンター）[13]と協同して学生の主体的な幅広い学びを支援することを表明し、連携を働き掛けている。

学習支援のための具体的な対応内容としては、学生への図書館案内、本の探し方やデータベースの使い方のガイダンス、個別相談への対応のほか、全科目のシラバス指定参考図書の収集・提供、大学での学びに関するさまざまなテーマ設定での特集展示[14]などを行い、また教員との連携によりゼミや科目・クラスごとにブックリストや情報探索ガイド（パスファインダー）の作成と提供、レポート課題の出題にあたっては必要とされる資料についての事前の所蔵調査、資料の購入・取り寄せ、レポート課題出題時の図書館資料の貸出禁止や配置場所変更、図書館資料のコピー無料化なども行っている。平成23年度には、１年次必修科目・キャリアデザインＩと２年次必修科目・基礎演習[15]の各１コマにおいて図書館利用ガイダンスを実施したほか、３年次以降のゼミや科目・クラスごとに授業内容と関連させながら各種のガイダンスを行っており、ガイダンスの全実施回数は38回であった。その他の授業支援対応は延べ60回を数えた。

３．大手前大学図書館における学生の図書館利用状況（2012年度春学期）

大手前大学図書館では、月ごとに入館者数、貸出数、レファレンス件数、相互利用件数などの統計を取り、学生１人当たりの貸出数やそれぞれの前年比を算出している。それらから学生の図書館利用状況をみるため、大学２年生から４年生が主に利用するさくら夙川キャンパスの図書館「メディアライブラリー CELL[16]」における、2011年度春学期

表１　図書館利用統計（メディアライブラリー CELL、2011・2012年度春学期）

	2011 春	2012 春	（月毎内訳）			
			4 月	5 月	6 月	7 月
開館日数	104	105	25	24	26	30
入館者数	73,460	82,127	17,261	19,430	19,762	25,674
前年比		112%	109%	133%	99%	111%
貸出数（学生）	4,843	7,681	1,114	2,259	1,918	2,390
学生１人当たりの貸出数	2.06	3.25	0.47	0.96	0.81	1.01
前年比		158%	121%	246%	137%	146%
相互利用件数（学生）	164	193	13	46	51	83
前年比		118%	57%	67%	109%	244%

および2012年度春学期の一部の値を抽出して表１にまとめた。

表１の貸出数とは、館外貸出資料の延べ貸出回数であるが、（館内で視聴するための）視聴覚資料の一時貸出分を除外して算出してある。また、学生１人当たりの貸出数とは、対象期間中の学生による貸出数をその年度の登録学生数[17]で除した値である。一般に、貸出数を登録利用者数で除した「実質貸出密度」（Circulation per Registration[18]）は、図書館の利用の程度を測る指標としてよく用いられる。ただし、図書館資料は、館外貸出以外に館内閲覧や複写などを通じても利用されるものであり、貸出は資料利用形態のひとつにすぎない。よって、実質貸出密度は明確に測定しうるひとつの指標ではあるが、図書館利用の一側面だけをとりあげたことになる。実質貸出密度をはじめとした貸出に関する指標によって図書館利用状況を評価する場合、常にこの点に留意しなくてはならないが、全体的な傾向として「館外貸出は図書館利用の大きな部分を占め、館内利用を含めた図書館資料の利用をかなり正確に表していると考えられる[19]」とされている。

一方、大手前大学生、特に通信教育課程の学生を除く学部生の図書館利用パターンとしては、図書館資料よりも図書館内で利用できる学生用パソコンの利用を来館目的としている場合も一定数あるとみられており[20]、貸出を中心とした統計には表れないそうした図書館利用も少なくないと考えられる。入館者数は、図書館入口に設けられたブックディテクションシステム[21]を使ってカウントしており、再入館が人数としてカウントされる分、実利用者数より多くカウントされることになるが、貸出を伴わないパソコン利用や館内閲覧などでの入館者を含めてカウントできる利点があり、貸出を中心とした利用状況の評価を補うものである。

表１の各項目をみると、入館者数、貸出数（学生）、学生１人当たりの貸出数の前年比において、５月が突出して増加しており、全体的にも前年度に比べて実績増となっている。そこでさらに学年ごとに算出可能な貸出数の推移について、学年ごとに３か年分を比較したものが図１である[22]。ここからは、2012年度春学期には各学年とも貸出数が伸びている中で、２年生の伸びが大きいことがみてとれる。

大学図書館での学生による貸出数を押し上げる強力な要因の一つに、授業に関連した課題において図書館資料の利用が推奨されるまたは必須とされる場合が考えられる。そこで、大手前大学図書館では従前より、教員からの情報提供を呼びかけ、レポートなどの課題に関する情報の収集を試みるほか、利用者との対応業務の中でも情報収集に努めている。以降で分析を行うキャリアデザインⅢは、授業プログラム自体も図書館利用教育の必要性が高い内容となっており、また事前の準備段階から図書館との連携がうまくいったケースであろう。しかし、教員から図書館への情報連携および学生からの個別相談などの中で把握できるのは全体の一部にすぎず、また学内の他の部署でもすべての課題出題状況について蓄積が図られようとしている段階であるが[23]、全体的な状況を確認で

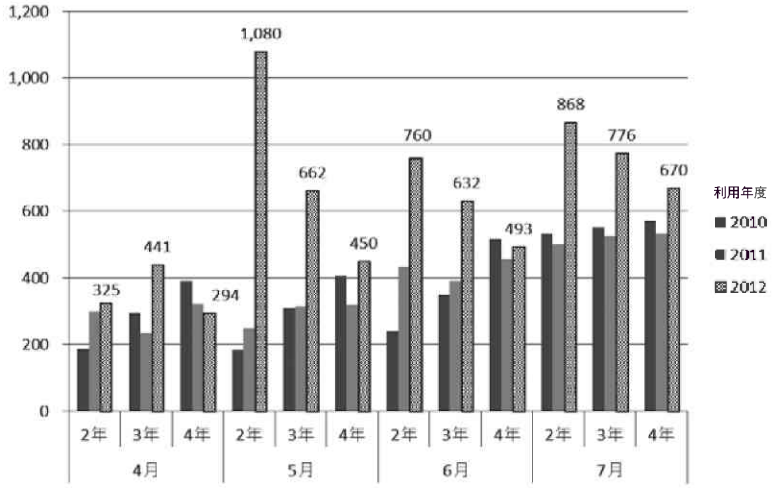


図１　学年ごとの貸出数推移（2010年度～ 2012年度・春学期）

きる状態にない。このため、大学図書館での貸出数の変動などについて、各科目における授業方針や学習内容との関連から推測することは往々にして難しい。2012年度春学期についても、図書館利用ガイダンスの実施実績は先述の前年度とあまり変化がなく、学生の図書館利用状況に影響を及ぼした要因がキャリアデザイン科目以外にもあったのかどうかについては、具体的な把握はできていない。

４．２年次必修科目における図書館利用教育と学習支援

⑴　2012年度キャリアデザインⅢのシラバス内容

2012年度のキャリアデザインⅢでは、大手前大学におけるリベラルアーツ型教育のグランドデザインに基づき、３年次以降の専門科目への導入としての位置づけにおいて、「それぞれの専門を学ぶ上での基礎的なアカデミックスキル（文献・資料収集、論文・研究レポートの執筆手法）の修得[24]」を目的としている。授業構成の概略は図２に示されるように、4000字以上の論文（研究レポートでもよい）を作成するための課題解決型学習（PBL）を中心とする内容で、PBLに関する課題（論文執筆に関連する課題。以降、PBL課題とする）と、時事問題や一般常識を知るための新聞･雑誌記事関連課題、ｅラーニング「レポートの書き方」の受講などによる学習で組み立てられている。PBL課題は、授業の進行にあわせて、PBL課題１として参考文献となる資料の収集とリストの作成、PBL課題２としてアウトラインの作成を行ってから、PBL課題３以降で段階を追って部分的に執筆をすすめ、論文を完成させていくことを目標とした構成となっている。

こうした学習の内容は、必然的に図書館利用教育の要素を必要とするものであるが、

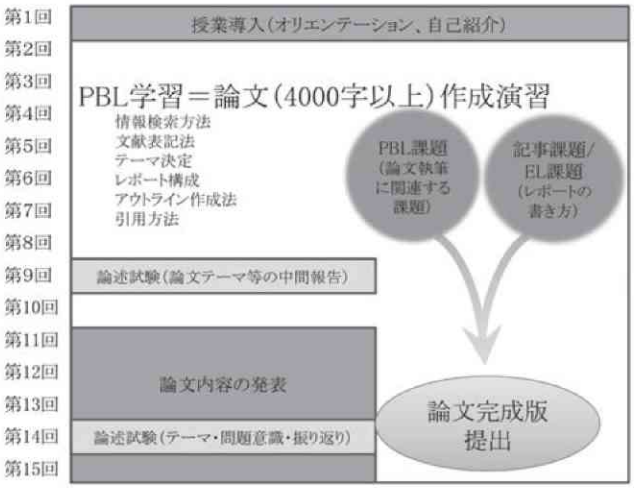


図２　キャリアデザインⅢの授業構成

１コマ90分（第５回授業）が情報検索方法、文献表記・引用方法ならびに図書館の利用方法を学ぶために割り当てられる計画であった。また、最終的な成績評価の基準において、Ｃ評価の要件に「論文（研究レポート）で参考文献の提示が正しくなされていること」、Ｂ評価の要件に「論文（研究レポート）で引用が正しくなされていること」（または文献などを用いて客観的な事実やデータを明確に示していること[25]）などが明示され、図書館利用教育との関連においてもクリアすべきポイントが明確となっている。

⑵　2012年度キャリアデザインⅢにおける図書館利用教育と学習支援の検討

以上のようなシラバスが作成されたことを受けて、コーディネーターと図書館スタッフとの打ち合わせを重ね、図書館スタッフが第５回授業内での図書館利用ガイダンス（約40分）と、それ以降のPBL課題のための支援対応を受け持つこととなった。

キャリアデザインⅢにおけるPBLのための支援対応としては、まずメディアライブラリー CELLの入り口に「論文･レポートを書こう～情報探索編～」と題する特集コーナーを設けて関連図書の紹介展示を行った。メディアライブラリー CELLでは、常設の別置コーナーとして論文・レポートの書き方などアカデミックスキルに関する図書を集めた書架を設けているが、論文・レポートの書き方の入門書、テーマの決め方や情報の探し方などに関連する図書47冊を、より目につきやすい図書館入口付近で展示紹介した。また、担当教員によって検討される論文テーマ候補についての情報収集を行い、各テーマに見合った文献資料の洗い出しと所蔵状況の調査が行われた。すべてのクラスのテーマ候補について情報を収集できたわけではなかったが、複数のクラスで重複して選択される可能性のあるテーマ候補を、ある程度把握することができ、一部のテーマに関しては

追加しての資料購入も行われた[26]。これらの図書館資料については、閲覧担当スタッフがおおよそを把握して学生からのレファレンス（相談）にスムーズに対応できるよう準備するとともに、特に利用が集中すると推測される資料については一時的に貸出禁止にする措置をとって利用可能性（availability[27]）を高めることとし、対象として図書305冊・雑誌19誌が選出された。貸出禁止の設定期間は、学生が参考文献となる資料の収集を行うPBL課題１の出題（５月８日）にあわせて開始し、論文の執筆がある程度すすむとみられる６月上旬までとした。

なお、一時的に貸出禁止とした資料については、館外貸出の代替として、キャリアデザインⅢ履修学生が必要な部分の複写をする際にコピー料金を図書館側で負担する（無料コピー）運用とし、「図書館資料複写許可書」の書式を準備した。これはキャリアデザインⅢ担当教員の許可印をもって無料での複写を認めるという手続き用紙と、図書館内での資料複写にあたって記入する従来からの文献複写申込書を一体化させたもので、多くの学生の参考文献入手を円滑にすすめるとともに、図書館内での複写の手続きや著作権法上の規定により図書館資料の複写が認められるのは一定の範囲であることなどへの理解を促すことも副次的な目的とした。この「図書館資料複写許可書」での複写申込は、最終的に116名が利用し、延べ311件に達した。

また、第５回授業内での図書館利用ガイダンスにおいては、「資料探しのコツ」「CiNiiでの文献検索」「聞蔵での新聞記事検索」「相互利用サービス、レファレンスサービスの紹介」という内容を図書館スタッフが約40分間で講義し、その後をうけて教員（コーディネーター）から著作権関連事項の解説、文献表記の必須要素、文献表記方法を解説することとした。

５．２年生の図書館利用状況（2012年度春学期）

キャリアデザインⅢにおける図書館利用教育および学習支援対応と学生の図書館利用状況との関連を考察するために、月次の図書館利用統計で扱っている貸出数に加えて、キャリアデザインⅢ用「図書館資料複写許可書」による複写申込の件数、相互利用（ILL）申込の件数の推移についてもあわせて、２年生の図書館利用状況を週単位で表したのが図３である。集計対象は2012年度の２年生のみであり、月曜日から始まる一週間分の貸出数、複写申込件数、相互利用（ILL）申込件数を集計し、貸出数と複写申込件数は左軸、相互利用（ILL）申込件数は右軸に件数をとっている。いずれも、参考文献について情報を収集しリストを作成するというPBL課題１－１が出題された後からグラフが伸び、PBL課題１－２の提出期限（出題の１週間後）を迎える週に貸出数と複写申込件数のピークが来ている。

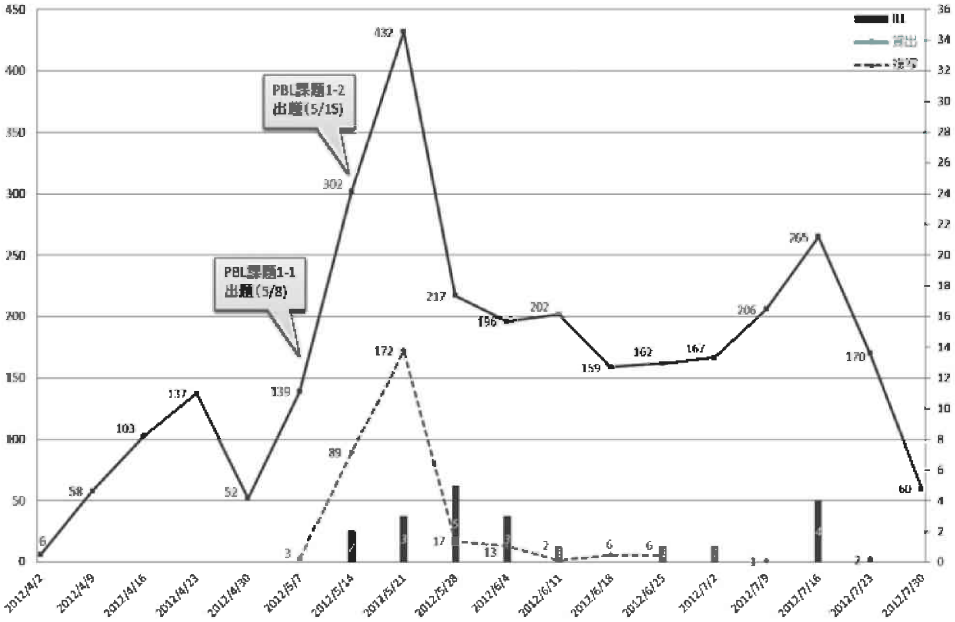


図３　２年生による図書館資料の利用動態（2012年度春学期）

ここでの学習課題、PBL課題１－１は第４回授業の授業外学習課題として出題されたもので、インターネット上の情報や資料にあたってもかまわないが、インターネット以外からも必ず３本以上の資料を挙げることと指示されていた。PBL課題１－２は、第５回授業（図書館利用教育）をうけてPBL課題１－１で作成した参考文献リストをブラッシュアップするという授業外学習課題であるが、新聞記事・インターネット以外から必ず３本以上、全体で５本以上の文献を挙げることと指示されていた。このため、図書や雑誌から参考文献を探そうと図書館資料を利用した学生が大幅に増えたものみられる。貸出数については、キャリアデザインⅢのPBL課題のために館外貸出を利用した件数を特定することはできないが、複写申込については貸出禁止資料の貸出に代わる利用で、かつキャリアデザインⅢのPBL課題のためと特定されるので、複写申込件数と同時期の貸出数の伸びはキャリアデザインⅢのPBL課題が大きく影響しているとみて差し支えないだろう。なお、利用件数の日次推移をみると、特にPBL課題１－２が出題されてからその提出期限日である５月22日までに多くが集中していることがわかる。表２に複写申込件数の日次推移と曜日毎の集計を示すが、貸出数の推移も同じように５月22日までに集中している。

ちなみに、６月５日時点でのPBL課題１－１～２の提出率は88～89％であり、７月31日時点では約92％となる。530名以上がなんらかの参考文献リストを作成して提出していることになる。そこで、春学期中に１度でも貸出、複写申込、相互利用（ILL）申込

表2　キャリアデザインⅢ用複写申込件数の日次推移と曜日毎の集計（2012年度春学期）

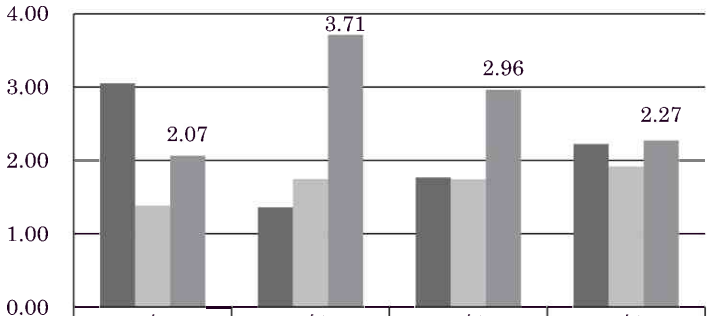
曜日	月	火	水	木	金	土	日
小計 (割合)	120 (38.6%)	68 (21.9%)	12 (3.9%)	35 (11.3%)	73 (23.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)
2012/5/7～		1			2		(休館)
2012/5/14～	5		2	28	54		(休館)
2012/5/21～	98	60	4	4	3	3	
2012/5/28～	3			1	13		(休館)
2012/6/4～	6		5	2			(休館)
2012/6/11～	1				1		(休館)
2012/6/18～	6						(休館)
2012/6/25～	1	5					
2012/7/9～			1				
2012/7/23～		2					

を行った学生の人数を算出すると、キャリアデザインⅢ履修者581名中383名の学生（65.9％）が、これらの利用を行っていたことがわかる。この実利用者（active user）[28] 383名中、実貸出者（active borrower）[29] は349名であり、貸出・複写とも利用したものが82名、貸出のみ利用したものが267名、そして複写のみ利用したものが34名であった。

6．学年別の図書館利用状況推移（2010年度～2012年度・春学期）

次に、2012年度2年生のこうした図書館利用状況と比較するために、2010年度～2012年度における学年別の貸出利用状況の推移を図4～図6にまとめた。図4は学生1人当たりの貸出数、図5は実貸出者の平均貸出数と標準偏差、図6は登録学生数に対する実貸出者の割合を示している。また、対象期間において2012年度のキャリアデザインⅢに相当するような、すなわち図書館利用教育という点において同一の授業内容・課題内容で複数クラスが運営される必修科目での、図書館利用教育に関連する内容を抽出し、概要を表3にまとめた。

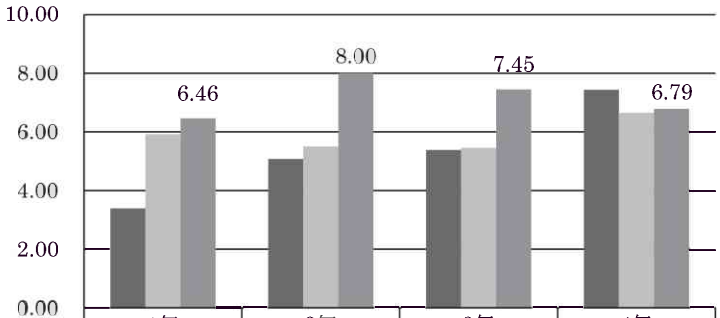
2010年度フレッシュマンセミナーⅠの取り組みでは、多くの学生に図書館サービスの印象付けや貸出利用を経験させることができたことから、登録学生数に対する実貸出者の割合が90％に達し、学生1人当たりの貸出数も高い値を示しているが、平均貸出数からは全体的に貸出が活性化しているとまではいえない。もっとも問題と考えられる点は、資料貸出という図書館サービスの実地体験をしたまではよかったが、図書館資料を借りているということ自体を忘れてしまって延滞者が続出したということである。（なお、2012年度のキャリアデザインⅢ履修者では、長期の延滞者は少ない。）



	1年	2年	3年	4年
■2010	3.05	1.36	1.77	2.22
■2011	1.38	1.75	1.74	1.92
■2012	2.07	3.71	2.96	2.27

図４　学生１人当たりの貸出数（2010年度～2012年度・春学期）

１）平均貸出数



	1年	2年	3年	4年
■2010	3.39	5.08	5.39	7.43
■2011	5.92	5.50	5.46	6.65
■2012	6.46	8.00	7.45	6.79

２）標準偏差

	１年	２年	３年	４年
2010	6.00	7.32	7.14	15.43
2011	8.03	7.61	5.88	8.16
2012	8.86	10.52	10.37	8.65

図５　実貸出者の平均貸出数と標準偏差（2010年度～2012年度・春学期）

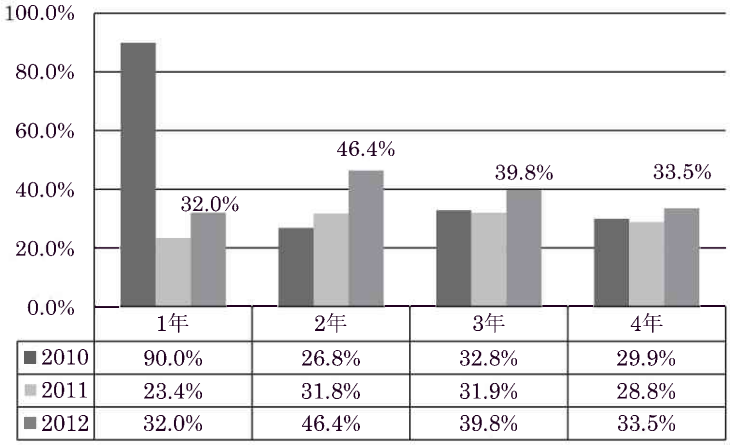


図6　登録学生数に対する実貸出者の割合（2010年度～2012年度・春学期）

表3　必修科目における図書館利用教育関連の内容（2010年度～2012年度・春学期）

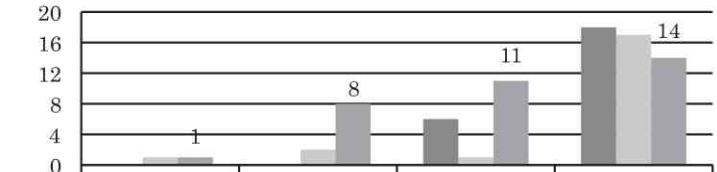
2010年度	フレッシュマンセミナーⅠ （1年次必修科目）	4月に授業の1コマ内で図書館スタッフが図書館利用ガイダンス（約40分）を行い、図書館資料1冊を選んでクラス内で紹介するために貸出を受けるという事後課題が課せられた。また、新聞記事を題材に要約、レポート作成、発表を行う演習が行われた。
2010年度	基礎演習200SP （2年次必修科目）	4月～5月に授業の1コマ内で図書館スタッフが図書館利用ガイダンス（約30分）を行い、OPAC検索などの課題を課して図書館スタッフも対応にあたった。また、教材として配布された資料の輪読、要約と発表を行う演習、夏休みに新書を1冊読んで要約を行うという課題が課せられた。
2011年度	キャリアデザインⅠ （1年次必修科目）	4月に授業の1コマ内で図書館スタッフが図書館利用ガイダンス（約35分）と図書館ツアー（約10分）を行い、OPAC検索などの課題を課して図書館スタッフも対応にあたった。また、夏休みに、推薦図書リスト内から選んだ本を読んで推薦文を書くという課題が課せられた。課題用の図書は、大手前大学に所蔵がない場合は公共の図書館に行くか、書店で購入するようにという指導が行われた。
2011年度	基礎演習Ⅰ （2年次必修科目）	4月に授業の1コマ内で図書館スタッフが図書館利用ガイダンス（約40分）を行い、OPAC検索などの課題を課して図書館スタッフも対応にあたった。また、教材として配布された資料の輪読と発表、グループ調査と発表を行うという演習が行われた。担当教員から要請のあったクラス毎に、図書館スタッフが図書館での調べ学習の支援や、文献検索ガイダンスを実施した。
2012年度	キャリアデザインⅠ （1年次必修科目）	テーマに沿って資料を収集するという演習が行われた。ただし、この場合の資料は図書館資料に限定されていない。（図書館利用ガイダンスは、入学オリエンテーションにおいて図書館スタッフが実施した。）

2011年度のキャリアデザインⅠの取り組みでは、図書館利用ガイダンスで学んだ内容から直接的に図書館資料の貸出を行うような課題の設定はなされなかった。夏休みの課題についても大学図書館に指定図書を用意するというような形ではなく、推薦図書リストの中から１冊を選び、大学図書館に所蔵がない場合は公共図書館か、書店で入手するようにという指導が行われた。推薦図書リストに挙げられた図書の半数以上は大手前大学図書館に所蔵されていたにもかかわらず、事後の履修生に対するアンケート調査結果によれば、アンケートに回答した課題提出者のうち大手前大学図書館を利用したという学生は11.9％にすぎず、その他の図書館を利用したという学生をあわせても25.4％にとどまっている[30]。なお、このキャリアデザインⅠ履修者のうち581名が、2012年度のキャリアデザインⅢ履修者となっている。

2011年度の基礎演習Ⅰの取り組みにおいても、図書館利用ガイダンスで学んだ内容から直接的に図書館資料の貸出を行うような課題の設定はなされなかった。クラス毎にそれぞれに展開された調べ学習の中で、積極的に図書館資料を利用したクラスや、追加しての図書館利用ガイダンスを受けたクラスもあり、貸出数増加の効果も多少あったとみられているが、2010年度のフレッシュマンセミナーⅠや2012年度のキャリアデザインⅢほど特徴的に変化がみてとれる結果とはなっていない。

2012年度のキャリアデザインⅠの取り組みについては、学生１人当たりの貸出数、実貸出者の平均貸出数、登録学生数に対する実貸出者の割合のいずれもが前年度に比べて上昇しているが、この科目の演習で取り扱う資料は図書館資料に限定されていない（インターネット上の情報源でもよい）ことから、2010年度のフレッシュマンセミナーⅠや2012年度のキャリアデザインⅢほど劇的な変化がみてとれる結果とはなっていない。

また、図７のように相互利用申込学生数を比較してみると、例年２年生の申込者はほとんどないのに比べて2012年度は８名となった。利用件数も、2011年度春学期には２名で６件であったものが、2012年度春学期には８名で20件を数える。2012年度の２年生に対する相互利用サービスの案内は、キャリアデザインⅢでの図書館利用ガイダンス以外



	1年	2年	3年	4年
2010	0	0	6	18
2011	1	2	1	17
2012	1	8	11	14

図７　相互利用申込学生数（2010年度～2012年度・春学期）

には行っていないということであり、８名の利用者は申込時期からみてもほぼキャリアデザインⅢの図書館利用教育をきっかけとした申込とみられている。4000字以上の論文を書くために文献資料が必要という目的意識と結びつきやすいタイミングで相互利用サービスについてアナウンスを行ったため、利用者数は少数であるとはいえ、効果があったものと考えられる。

こうした各年度での図書館利用状況の差異からは、やはり同一の授業内容・課題内容で複数クラスが運営される必修科目での図書館利用教育と学習支援が、その内容によりさまざまな形で効果を表しているものと考えられる。

７．2012年度２年生の図書館利用における経年変化

続いて、2012年度２年生（2011年度入学者）と2011年度２年生（2010年度入学者）について、１年生春学期および２年生春学期の実貸出者割合と平均貸出数を図８で比較する。2011年度入学者は、キャリアデザインⅢを履修している２年生５月以降に、実貸出者割合・平均貸出数とも比較的高い水準で移行している。2010年度入学者において、先述のフレッシュマンセミナーⅠでの課題取り組みにより、１年生４月に実貸出者割合が75％超を記録してから急激に下降するのと引き換えであるかのように平均貸出数が上昇していることとは対照的である。（標準偏差については図５を参照）

また、実貸出者割合の伸びに関連して、キャリアデザインⅢ履修者の１年生時点での図書館利用状況にも注目してみてみると、１年生の１年間を通じて図書館利用の実績がゼロの、すなわち統計データ上では資料の館外貸出のみならず館内視聴のためのDVD等の一時貸出利用もなかった学生334名中、198名（キャリアデザインⅢ履修者全体の34.1％）は２年生の春学期も図書館資料の利用記録（貸出のほかキャリアデザインⅢ用複写申込および相互利用申込も含む）がない。しかし、残りの136名（同23.4％）は２年生になって図書館資料の利用があった。また、１年生の１年間を通じて図書館利用の実績があった（統計データ上、資料の館外貸出や館内視聴のためのDVD等の一時貸出利用があった）学生247名（同42.5％）は、２年生になってからも（統計データ上）図書館資料の利用があった。それらの学生の１年生の１年間を通じた図書館利用状況を、視聴覚利用（館内視聴のためのDVD等の一時貸出利用）のみのグループと、資料の館外貸出も行ったグループに分けると、図９となる。１年生時点ではいたみ稲野キャンパス、２年生以降はさくら夙川キャンパスでの図書館利用が主となるが、１年生の１年間を通じた図書館利用状況の各グループと、２年生春学期での図書館資料の利用記録有無との関連は、χ二乗検定（$p<2.2e\text{-}16$）および標準化残差より統計的に有意と考えられる。

さらに２年生になってからの図書館利用が記録された初日を確認してみると、１年生

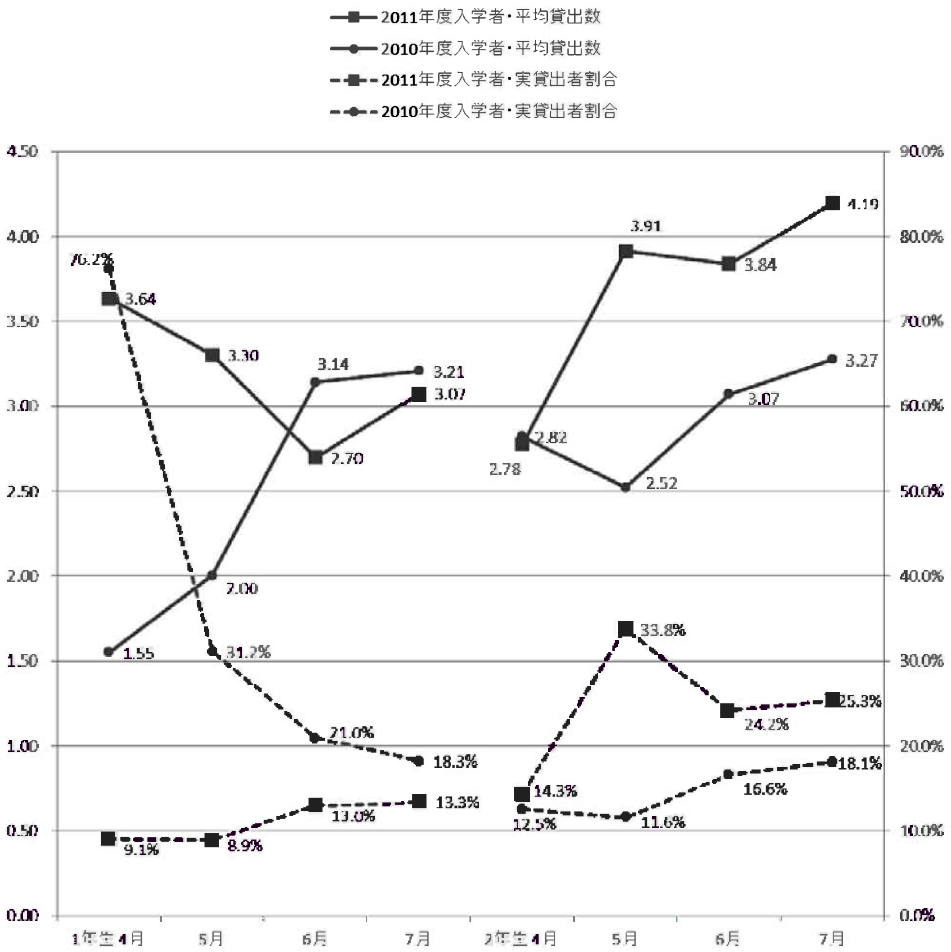


図８　2010年度入学者と2011年度入学者での平均貸出数と実質貸出者割合の比較

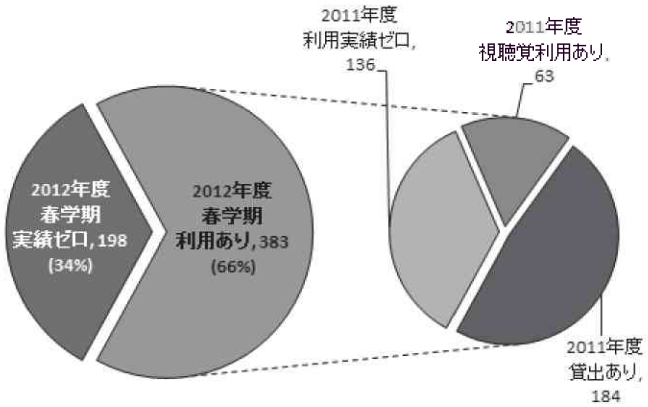


図９　2012年度キャリアデザインⅢ履修者の2012年度春学期図書館利用実績と、2011年度の図書館利用実績

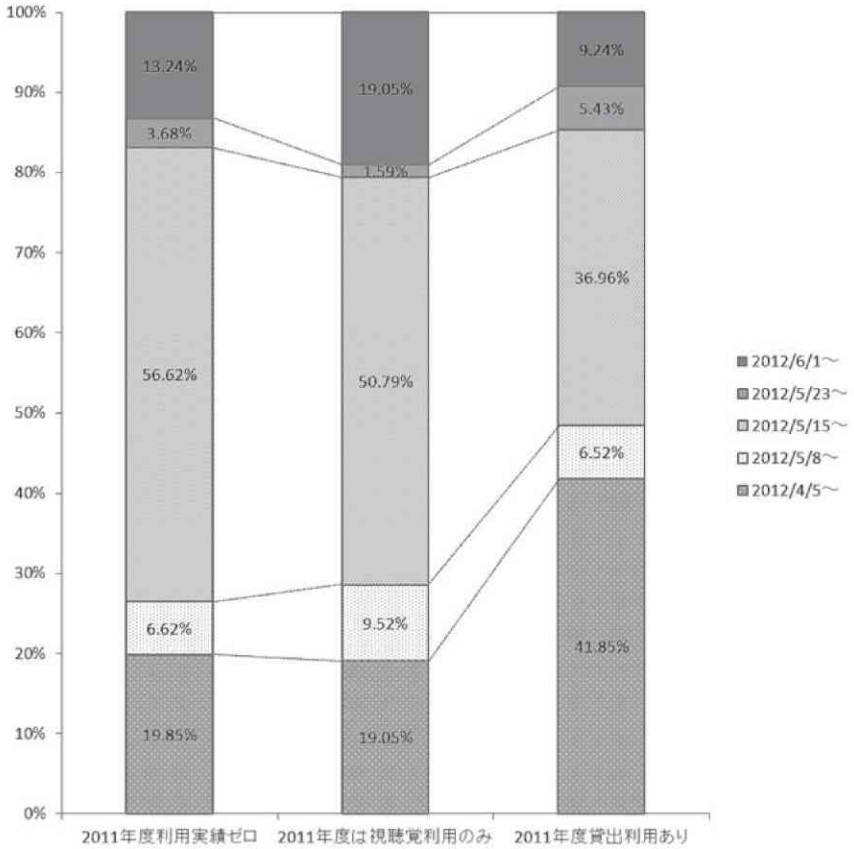


図10　2011年度図書館利用状況のグループごとにみた、2012年度２年生の図書館利用時期

の１年間で図書館利用の実績がゼロだった学生136名、貸出ノートパソコンを含む視聴覚資料の利用のみだった63名のいずれのグループも、そのうちの約50％以上の学生が2012年５月15日（火曜日）、すなわちキャリアデザインⅢのPBL課題１－２が出題された第４回授業日以降、課題の提出期限日までに初めて図書館資料の貸出等を利用している。（図10）

これらのことから、２年生でのキャリアデザインⅢにおける図書館利用教育およびPBL課題１－１～２の出題によって、それまで図書館資料を利用していなかった学生も、図書館資料の利用を促されるという効果があったと考えられる。

８．2012年度２年生における図書館利用教育の効果と意義

ここまで、まず２章で大学図書館における図書館利用教育のありかたについて確認し、３章で大手前大学図書館の全体的な利用状況を概観した上で、キャリアデザインⅢの学

習内容、図書館利用教育の内容と学習支援の内容、２年生の図書館利用状況についてを検討した。次いで、それまでの取り組みとの違いについて確認した。まず、キャリアデザインⅢにおける取り組みは、２章に述べたように大学図書館での図書館利用教育が目指すべきところと非常によく合致していたといえる。そして、学生が資料を必要とする段階で図書館利用ガイダンスを実施できたこともよりよく作用しただろう。PBLと連動して図書館利用教育が行われたことで、多くの学生に図書館資料の利用を効果的に促したという点では、大きな結果を残したといえる。その効果が、１年生時点より図書館資料の利用を経験してきた学生に限らず、図書館資料を利用してこなかった学生にも及んでいる点は、なによりも特筆すべきである。

また、学生の活発な図書館資料利用を支えるための対応として、論文テーマ候補に見合った文献資料の調査を始めとした大学図書館側の準備作業と支援体制、特に利用が集中すると推測される資料については一時的に貸出禁止にする措置をとったことまでも含めて、大学図書館が提供できる資源の利用可能性を可能な限り高め、おおむね適切な対応であったといえるだろう。しかしながら、具体的にどれほど効果的な対応がとれていたといえるのか、また今回の取り組みがまったく一時的な図書館利用の促進をもたらしたに過ぎないのではないか、といったことについて、さらに複数の観点から評価されることが必要と考えられる。

第一に、資料収集とリスト作成という課題のための図書館資料利用の支援が、4000字以上の論文（研究レポート）を執筆するというPBL自体にどれほど役立つ要素となり得ていたか、という点である。しかしこれは評価の難しい問題である。『図書館の自由に関する宣言』の第３に「図書館は利用者の秘密を守る」[31]とうたわれているように、図書館は利用者の貸出履歴の取り扱いを通じてプライバシーを侵害することがないよう配慮すべきことから、今回の検討についても、貸出履歴データなどの図書館利用に関する記録の分析においては利用対象資料を具体的に明らかにしない形で処理した。そのため、新たに収集した資料あるいは貸出禁止措置の対象として選定された資料が、結果的にどれほど利用されたかを把握して選択が適切であったかを評価することはできなかった。また、例えばPBL課題１－１～２のためにキャリアデザインⅢ用「図書館資料複写許可書」で複写申込みされた資料が、最終的に執筆された4000字以上の論文（研究レポート）において参考文献として挙げられたかどうかなどを、個別に追跡して確認することはできなかった。一方で、学生によっては、最終的に仕上げた論文の参考文献リストが、PBL課題１－１～２で作成した文献リストとはまったく異なり、例えばインターネット上の情報源に偏っていたというようなケースも少なからずあったことが判明している。このことから、学生の書きあげた論文（研究レポート）の内容に照らして、参考文献に挙げられた文献資料の妥当性を評価するということが、（図書館利用教育の観点からも

重要ではあるものの）ステップ化されたPBLに対する評価として行われるべきではないかと考える。

第二に、キャリアデザインⅢにおける取り組みをとおして図書館資料を利用した学生たちにとって、そうすることが特定の科目での特定の学習活動ということで終わらずに、図書館利用が自然と定着したものになり、幅広い学びの全般においても応用されうるスキルとなるのかどうか、ということがある。図３・図８にみてとれるように、2012年度２年生の図書館利用状況はPBL課題１－１～２の提出期限後も引き続き高い水準での推移を続けていて、4000字以上の論文のアウトライン作成や執筆をしていく過程においてさらに文献資料を必要とした学生が、図書館資料を利用し続けたということが考えられる。しかし、学習の中に図書館利用が定着しているといえるかどうかは、判断しがたい。キャリアデザインⅢの課題をとおして、学生が自ら資料を探して活用するスキルを身に付け、その重要性を理解していれば、他の科目での課題に取り組む際にも図書館を積極的に利用するようになると考えられる。そうした傾向は、この学生たちがより専門的な学びを深めていく段階で、いずれ図書館利用状況の統計上に反映される形となる可能性も高いが、今後の中長期的な評価を待つことになるだろう。

謝辞

本稿では図書館利用教育との点から２年次必修科目の一部分を取り上げたにすぎませんが、2012年度の２年次必修科目の授業運営にあたっては、授業を担当いただいた先生方のご協力のもとで、特にコーディネーターの谷村先生、本田先生、小尾先生に御尽力いただいたことによりこれが成し遂げられました。そしてまた大学図書館ならびに学習支援センターをはじめ、関係教職員・チューターの各位に多大なるご協力をいただいたことを、ここに記して感謝申し上げます。

注・引用（参考）文献

1　大手前大学「建学の精神・使命・目標」[http://www.otemae.ac.jp/about/outline/kengaku.html]（Accessed 2012-11-25）

2　大手前大学「コアカリキュラム」[http://www.otemae.ac.jp/career/design/core.html]（Accessed 2012-11-25）

3　日本図書館協会図書館利用教育委員会編「図書館利用教育ガイドライン―総合版―」『図書館利用教育ハンドブック 大学図書館版』日本図書館協会, 2003, p. 2 .

4　図書館情報学分野を中心におそらくもっともよく引用されているだろうAmerican Library Association（ALA）による情報リテラシーの定義（1989）は、「情報が必要なときそれを認識し、必要な情報を効果的に見つけ、評価し、利用する能力」となっており、既に図書館という枠を離れたものとなっている。また、日本では日本図書館協会による『図書館利用教育ガイドライン』において、情報リテラシー教育を「情報の生産・流通・検索・獲得・加工・保管・消費・表現・評価などあらゆる側面に関する知識・技能の習得を支援する教育」

と定義している。
日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ガイドライン：図書館における情報リテラシー支援サービスのために』合冊版, 2001, 日本図書館協会, p.44.

5　文部科学省科学技術・学術審議会　学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像―」2010［http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm］（Accessed 2012-11-15）

6　次の研究文献レビューに詳しい。
赤瀬美穂「情報リテラシーと利用教育」『図書館界』53 (3), 2001, pp.314－321.
安藤友張「図書館利用教育・情報リテラシー教育をめぐる動向：1990～2001」『情報の科学と技術』52 (5), 2002, pp.289－295.
野末俊比古「研究文献レビュー 情報リテラシー教育―図書館・図書館情報学を取り巻く研究動向」『カレントアウェアネス』302, 2009, pp.18－24.

7　日本図書館協会図書館利用教育委員会編「図書館利用教育ガイドライン―総合版―」『図書館利用教育ハンドブック 大学図書館版』日本図書館協会, 2003, p. 2 .

8　The Association of College and Research Libraries（野末俊比古訳, 魚住英子・小島勢子改訳）「高等教育のための情報リテラシー能力基準」2000, p. 1 .［http://www.ala.org/acrl/sites/ala.org.acrl/files/content/standards/InfoLiteracy-Japanese.pdf］（Accessed 2012-11-15）

9　日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ガイドライン：図書館における情報リテラシー支援サービスのために』合冊版, 2001, 日本図書館協会, p.81.

10　大城善盛「情報リテラシーとは？：アメリカの大学・大学図書館界における論議を中心に」『情報の科学と技術』52 (11), 2002, pp.550－556.
大城善盛「大学図書館界を中心とした情報リテラシー論：アメリカ, オーストラリア, イギリスにおける議論を中心に」『大学図書館研究』82, 2008, pp.23－32.
大城善盛「21世紀のアメリカの大学図書館における情報リテラシー教育：私立大学協会の『図書館変革』と『情報フルエンシー』のワークショップを中心に」『大学図書館研究』91, 2011, pp.24－34.

11　赤瀬美穂「情報リテラシーと利用教育」『図書館界』53 (3), 2001, pp.314－321.

12　長田秀一, 菊池久一, 板垣文彦『情報リテラシー教育：コンピュータリテラシーを超えて』1999, サンウェイ出版, p.68.

13　特に学習支援センター、ITサポートセンター、資格サポートセンターは、大手前大学図書館の１階閲覧室を取り囲むcellと呼ばれる小部屋に設けられていて、メディアライブラリーCELLでのワン・ストップ・サービス化が図られ、有機的な連携を目指した取り組みがなされている。
大手前大学・大手前短期大学図書館「メディアライブラリー CELL/cell（小教室）のご案内」［http://library.otemae.ac.jp/lib/cellsguide.php］（Accessed 2012-11-25）

14　2012年度秋学期よりwebサービス「ブクログ」を利用して特集展示の内容（一部抜粋）を公開している。
大手前大学・大手前短期大学図書館「大手前大学 メディアライブラリー CELLの特集」［http://booklog.jp/users/otemaecell/］（Accessed 2012-11-25）

15　平成23年度までは２年次の必修科目として「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」が設定されており、平成24年度より「キャリアデザインⅢ・Ⅳ」が設定されている。

16　大手前大学図書館は、大学２年生から４年生が主に利用するさくら夙川キャンパスのメディアライブラリー CELLと、大学１年生が主に利用するいたみ稲野キャンパスの伊丹図書館の２館からなるが、伊丹図書館は大手前短期大学生の利用もあって大手前大学生の利

用と不可分であるため、メディアライブラリー CELLの利用統計を示した。

17 登録学生数には、通信教育課程の学生を除く学部生数を用いている。

18 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会『図書館ハンドブック第6版』日本図書館協会, 2005, p.177.「表Ⅲ－6　評価指標」

19 岸田和明, 逸村裕, 高山正也「大学図書館における館外貸出データの分析手法：オブソレッセンスと貸出頻度分布の分析を中心として」『図書館研究シリーズ』31, 1994, pp.79－127.

20 図書館内でのパソコン利用状況を示す具体的な、かつ継続的に蓄積された調査データはないが、2011年度に実施された二つの調査の結果では、ともに来館目的においてパソコンの利用が高い度数となって表れている。

岩倉光助, 高橋徹, 蒋逸凡, 中井孝幸「大学図書館の施設構成からみた学習スタイルについて：居場所の形成からみた大学図書館の施設計画に関する研究 その1」『東海支部研究報告集』⑽, 2012, pp.457－460.

蒋逸凡, 高橋徹, 岩倉光助, 中井孝幸「大学図書館における学習スタイルと座席選択について：居場所の形成からみた大学図書館の施設計画に関する研究 その2」『東海支部研究報告集』⑽, 2012, pp.461－464.

大手前大学・大手前短期大学図書館「平成23年度図書館利用者アンケート調査結果」2012［http://library.otemae.ac.jp/lib/documents/enq2011.pdf］（Accessed 2012-11-15）

21 Book Detection System（BDS）は、図書館資料の無断持ち出しなどを防止するための管理装置である。貸出処理をしていない図書館資料を持って出入口に設置されたゲートを通ると警告音が鳴るというシステムであるが、通過者を感知してカウントするためのセンサーも装備している。

22 これ以降の図書館利用統計データにおいては、メディアライブラリー CELLのみでなく伊丹図書館での利用についても含めた全体としている。

23 2011年度1年次科目より、学生への課題及び試験問題をPDF化して蓄積していく取り組みが開始されている。将来的には、これらの蓄積された情報を活用して分析を試みるための環境整備も進む可能性がある。

24 2012年度大手前大学シラバスより引用。

25 2012年度大手前大学シラバスより引用。

26 テーマ候補についての情報連携を受けた3月末から順次調査と選書がすすめられ、最終的には図書47冊が4月から5月にかけて受入・配架されるという迅速な対応が実現された。

27 次の規格において、「利用者が要求したときに、コンテンツ、資料、施設又はサービスについて、実際に図書館が提供できる程度」と定義されている。

JIS X 0812：2012. 図書館パフォーマンス指標.

28 次の規格において、「報告期間中に、来館した、又は図書館の施設若しくはサービスを利用した登録利用者」と定義されている。

JIS X 0814：2011. 図書館統計.

29 次の規格において、「報告期間中に、一つ以上の資料を借り出した登録利用者」と定義されている。

JIS X 0814：2011. 図書館統計.

30 2011年度秋学期にキャリアデザインⅠ・Ⅱコーディネーターが実施したアンケート調査の結果による。回答率は86.1%。

31 日本図書館協会図書館の自由委員会, 日本図書館協会『「図書館の自由に関する宣言1979年改訂」解説』第2版, 日本図書館協会, 2004, p. 7 .